

指導資料

鹿兒島県総合教育センター

生徒指導 第58号

—小, 中, 高, 特別支援学校対象—

平成21年10月発行

非行傾向のある児童生徒へのカウンセリングを活用した対応の在り方

近年、様々な社会の変化を背景として、少年非行の増加や低年齢化が指摘されている。加えて、少年による社会を震撼させるような重大事件も発生している。

学校においては、規範意識を培う指導や教育相談体制の充実など、児童生徒の健全育成に向け様々な取組を進めているところである。

本稿では、非行傾向のある児童生徒を校則違反や教師への反発等の行為が既に見られる児童生徒ととらえる。そして、その非行傾向を、少年非行へと発展させないための対応の在り方について、カウンセリングの理論や技法の活用を中心に述べる。

1 本県における暴力行為の状況

文部科学省の調査によると、本県の公立学校における暴力行為の発生件数の推移は、図1のような状況である。

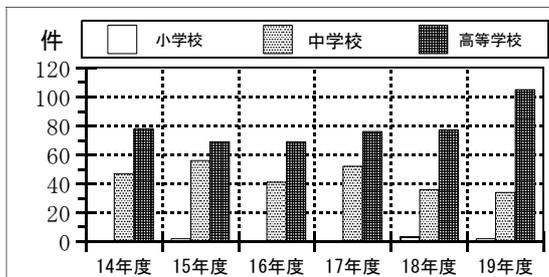


図1 本県における暴力行為の発生件数の推移 (「文部科学省 平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」から)

平成18年度から平成19年度にかけて、高等学校における発生件数は77件から105件と増加している。小学校においては、平成18年度が3件、平成19年度が2件と2年連続して暴力行為が発生している。

また、図2は、平成18年から平成20年中において、警察が扱った本県の校内暴力の件数の推移である。

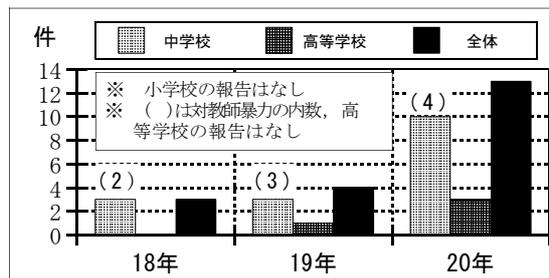


図2 本県における校内暴力の件数の推移 (「鹿兒島県警察本部生活安全部少年課 平成20年少年白書」から)

本調査によると、過去3年間の推移においては、校内暴力が増加傾向にあり、学校として、予断を許さない状況にある。

暴力行為は、当事者はもちろんのこと、周りの児童生徒や保護者等に与える動揺や影響も非常に大きい。

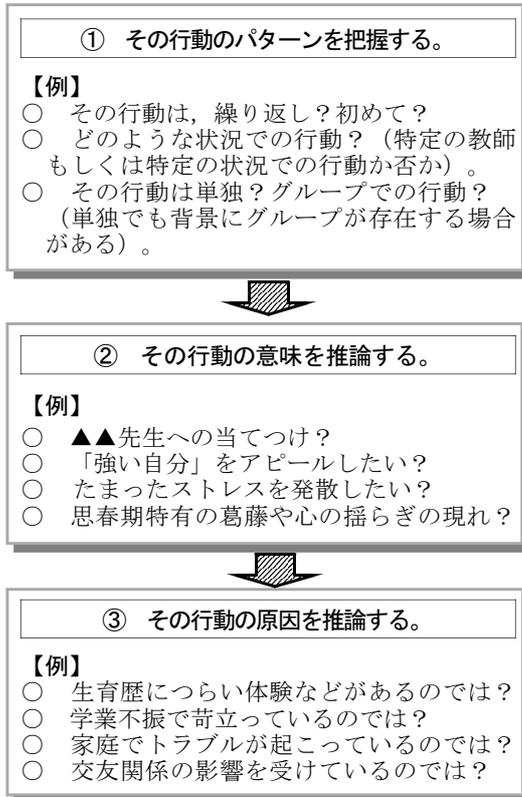
学校においては、個々の児童生徒への理解を深め、カウンセリングの理論や技法を活用した対応を、早期に進めていくことが求められている。

2 非行傾向のある児童生徒への理解と対応

非行傾向のある児童生徒への理解と対応においては、児童生徒の行動を理解し、カウンセリングの基本である受容的・共感的な態度で進めていく必要がある。

(1) 児童生徒の行動への理解

児童生徒の行動への理解は、基本的に、次の3つの観点で行う。



【①～③の観点を踏まえた行動への理解例】



図3 教師に反発するA男の行動への理解

(2) 児童生徒への対応の在り方

ア 対応の基本的な考え方

児童生徒の行動への対応においては、自己指導能力の育成の観点から、次の3点を重視して対応する必要がある。

- 人間的ふれあいを大切にし、共感的人間関係を構築する。
- 自己存在感（自分が価値ある存在であることを教師の姿勢から実感させる）。
- 児童生徒が自ら考え、行動を自己決定する場を設定する。

イ 対応上の留意点

上述の基本的な考え方を踏まえ、次のような点に留意しながら対応していくことが大切である。

- 児童生徒との人間関係づくりに努める。
- 児童生徒の存在を認める（無視や差別的なかかわりをしない）。
- 児童生徒の努力を認める（日頃からほめる材料を見つけようとする意識をもつ）。
- 「干渉されたくないが、見捨てられたくない」という複雑な心理を念頭に置く。
- 指導する場合は、児童生徒の自尊心に配慮し、皆の前で追い詰めることは避ける。
- 指導する場合は、児童生徒の間違った行動に焦点を当てて叱る（「君はいつもそうだ」、「そんなことはダメな人間のすることだ」のような発言は、相手の人格まで否定することになるので状況を悪化させる）。
- 指導する場合は、児童生徒にも考えさせる時間を与え、自発的行動を促す。

ウ 行動修正に向けた対応のポイント

行動修正に向けた対応には、児童生徒の誤った思い込みや考え方への働きかけが必要である。次に、その働きかけ方について示す。

児童生徒の誤った思い込みや考え方を見つけた場合、次の観点から話し合い、修正することを求めていく。

- ① それは事実にあうか。
- ② それは筋が通っているか（合理的か）。
- ③ それは自分自身や周囲を幸せにするか。

【例：「教師なんてだれも信じられない。」】

- 本当に、全部そうなのか？
- だからそういう行動をしたのか？
- それは、よい結果につながっているのか？

エ 面談による対応の実例

面談による対応においては、初回のかかわり方が非常に重要であり、継続的なかかわりへの鍵となる。

そこで、児童生徒を呼び出した場合のかかわり方のポイントを示す。

- ① 呼び出しに応じたことに対して、温かい言葉かけをする（一人の対等な人間として向き合う）。
- ② 問題となっている行動を、いきなり責めたりしない（まずはコミュニケーションの成立を目指す）。
- ③ 本人が不満に思っていることや言い分を聴く（否定も肯定もせず、児童生徒の気持ちの言語化を図っていく）。
- ④ 児童生徒に、少しずつ質問をしながら、気持ちを整理させていく（教師も状況把握と課題の整理を心の中で進める）。
- ⑤ 1回の面談で多くを解決しようとせず、2回目につながる形で面談を終わる。

【参考事例】

【事例の概要】

授業開始時に、遅れて入室してきたA男に対して、B教諭が、「なんだ？遅れてきて勝手に座るのか？」と叱責した。
その言葉に、かっとなったA男は、「うるせえんだよ！」と怒鳴り、机を蹴り倒して、教室を出て行こうとした。
それを止めようとしたB教諭とA男がもみ合いになったが、何とかその場は収まった。
その後、B教諭から報告を受けた担任のC教諭は、放課後A男を教育相談室に呼び出して向き合う。



C教諭：「よく来てくれたな。さあ、そのソファーにかけて。」
A男：（応答せず）
C教諭：「一体何があったんだ？言いたいことがあったら何でも言ってみろ。全部私が聴くから。」
A男：（B教諭の指導の仕方や学校への不満をぶちまけた）
C教諭：「うん、うん、なるほどな…。その言葉を言われた瞬間頭の中が真っ白になってしまったんだな？」
A男：「そうだよ！いつもいつも頭ごなしに言わないで、遅れた理由くらい聞けってんだ…。」
C教諭：「そうか、遅れたのには何か理由があったんだな？」
A男：「今日はそうだよ！どうせ俺たちは、問題児ってレッテル貼られてるから考えもしないだろうさ。」
C教諭：「そうか…。これまでも腹の立つようなことがあったんだな…。」

3 カウンセリング技法を活用した対応

非行傾向のある児童生徒への対応には、次のようなカウンセリング技法を活用することも有効である。

(1) コラージュ技法の活用

コラージュ技法とは、雑誌の写真などはさみで切り抜き、紙に糊で貼り付けて構成する描画療法の一つである。



図4 コラージュの作品例

ア コラージュ技法の主な有効性

- リレーション（関係性）の不十分な児童生徒とのかかわりの導入を進めやすい。
- 技術的に簡単なので、絵を描くことが苦手の児童生徒でも集中して取り組める。
- 表現された作品を基に、本人の内的世界を感じながら面談を進めることができる。

イ コラージュ技法を活用した実践例

(ア) 人間的ふれあいの糸口として

- ① 「今日は、こんなのをちょっとやってみないか？はり絵みたいなものだけど…。」
- ② 「ほおー、なかなかよくできたじゃないか！バイク好きなのか？真ん中にでかいバイクの写真が貼ってあるけど…。」
- ③ 「なかなかいい作品になったな。次回もいろいろな雑誌を用意しとくよ。私も一緒にやってみたくなった。」

(イ) 自己決定を促す手立てとして

- ① 「今日は、『今の私』みたいなテーマを決めてやってみないか？」
- ② 「なるほど、こんな感じか…。これが今の自分の姿のイメージなんだね。」
- ③ 「もしよければ、この作品が、なぜ『今の私』なのか、私に分かるように説明してくれないかな？」
- ④ 「そうか…。そんな思いがこの作品には込められてたんだな…。」
- ⑤ 「それじゃどうだろう、今度は、その作品の裏に、『5年後の私』みたいなテーマで作ってみてくれないか？」

(2) ロールレタリングの活用

ロールレタリングとは、自分自身が自己と他者との双方の役割を演じて手紙のやり取りをする心理技法である。

教師による面談とともに、このような自らと対話を行う心理技法を活用した取組も非常に有効である。

ア 「書くこと」の主な有効性

- 書くことを通して、「自己の内面との対話」を進めることができる。
- 書くことを通して、「問題への気付き」を促すことができる。
- 書くことを通して、「心身の解放」を促すことができる。

イ 段階に応じた実践例

(ア) 第1段階：ストレスの発散

【例】

教師に対して、日頃の不満を思い切り手紙の中でぶつけ、後日、教師の立場で自分に返事を書く（図5）。

(イ) 第2段階：価値ある自分の実感

【例】

児童生徒が自分の成長を実感できるように、「〇〇の時の自分」に手紙を書き、後日、「〇〇の時の自分」の立場で現在の自分に返事を書く。

(ウ) 第3段階：他者の心情の理解

【例】

自分の言葉で傷付けてしまった友達のつらさに思いを寄せるために、「悩む友達」に手紙を書き、後日、「悩む友達」の立場で自分に返事を書く。

ウ ロールレタリングを行うときの留意点

- 書いた手紙は、本人以外見ないことを前提として書かせること。
- 自分以外の方が読むことはないので、安心して本音で書くよう指導すること。
- 最初、なかなか書けなくても、焦らず見守ること。
- 手紙の返事は、3日程度間を置き、手紙を読み返した後に書かせること。
- 本人が教師に読んでほしいと伝えてきた場合は、読んで教育相談に役立てること。

【実践例】

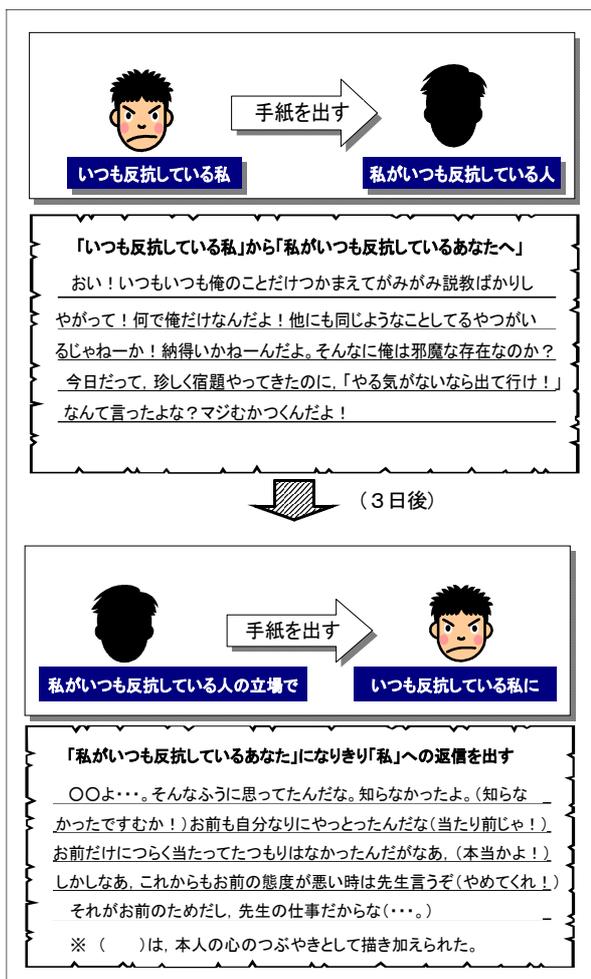


図5 ロールレタリングの実践例

学校においては、非行傾向のある児童生徒が、周囲から理解されないまま、少年非行という形に自己存在感、自己拡大感を求めていく事態を全力で防がなければならない。

教師には、深い児童生徒理解をもって児童生徒のおかれた状況を的確にとらえ、機を逃さず指導していくことが求められる。

【引用・参考文献】

- ・ 國分康孝編集『問題行動と育てるカウンセリング』1998 図書文化
- ・ 國分康孝・國分久子監修『非行・反社会的な問題行動』2003 図書文化
- ・ 松原達哉編著『非行－暴力・性的問題・薬物乱用－に対応するカウンセリング』2000 学事出版
- ・ 藤掛明著『非行カウンセリング入門』2002 金剛出版
- ・ 岡本泰弘著『実践ロールレタリング』2007 北大路書房

(教育相談課)